

p. 74の「カモノハシガヤ」はカモノハシガヤではなくむしろp. 79と同じヒメオニササガヤではないかと思われる。茨木氏も書いている通り、南西諸島のイネ科植物には在来外来を問わずまだ分類学的に検討すべき課題も多く、本書の出版を機により深いレベルでこの地域のイネ科植物への理解が深まって研究が進むことを期待したい。

(米倉浩司 Koji YONEKURA)

□小林史郎：土佐の植物暦 Shiro KOBAYASHI: **Monthly Wild Flowers in Tosa** A5判. 220 pp. 2020. 高知新聞総合印刷. ¥1,800 + 税. ISBN 978-4-010284-00-2.

2019年に南谷忠志「宮崎の植物方言と民俗」(鉱脈社 ISBN978-4-86061-732-5)が出版され、巻頭言を書かせていただいた。本書の「植物暦」というタイトルから、そのような人間の生活に沿った内容かと思ってページをめくったら、2月から順に毎月の植物の紹介だった。高知新聞夕刊に11年3029回に渡って連載した記事がもとになっているということで、それだけの連載を続けることができた著者の植物知識と体力・気力にまず圧倒されつつ読み始める。2月のホトケノザに始まり翌年の1月のシモバシラまで、1ページに基本的に3種類の植物が、写真1点と、和名、学名、科名、植物のくらし、分布、案内文で紹介されている。主要な記述である案内文は簡潔かつ親しみやすいものである。一月の中の植物の配列基準は説明されていないが、現地の植物をよく知っている小林ワールドなのであろう。抵抗なく進んでいける。また、どこから見始めても楽しく読める。

本書のような地域の植物を紹介する単行本は間断なく各地で発行されていると言ってよいだろう。特にカラー印刷費が下がり、出版が手軽にできるようになってから、カラー写真が多数掲載されるようになった。また、同様の内容のホームページが公開されている例も数多い。それらを読み、見ることは二重の楽しみがある。ひとつは、分布が狭く珍しい種類を写真で見たり、普通種であっても掲載された写真に地域的な変異を見たり、めったに気づかないような特徴を目にすることである。このことは以前から、ハーバリウムを探索することには現地調査に優るとも劣らない意義がある、と言われていることと共通しているように思う。も



うひとつは、説明文によってこれまで知らなかったことに気づいたり、写真をより深く見ることができたりすることである。そうした写真や文章の奥深さは著者の個性を表しており、本書については小林ワールドと表現するのが適当だろう。読者はワールドに滞在し、一般的な情報ばかりではなく、著者がこっそり漏らしてくれた秘密を見出して喜ぶ。さらに、著者のワールドを受け入れるだけでなく、隙があれば写真同定の間違いを指摘したり、著者がまだ発見していなさそうなことを発見したりして、こちらにもワールドがあるぞと主張する楽しみもある。オトギリソウの黒線をつぶすと赤い汁がでることは知らず、イヌビワとイヌビワコバチの生活史やハマナタマメの花形の変異を再確認。筒口が太いモミジカラスウリのポリネータはキカラスウリと同じスズメガなのだろうか、とか、高知県にはツクシハギが多いというがビッチュウヤマハギはどうだろうか、とか、その他恥ずかしいのでここに書けない疑問もあれこれ湧いて来て、本書の小林ワールドは、まだしばらく楽しめそうである。(邑田仁 Jin MURATA)